

クラブビジョン提言

今年度、長期戦略計画委員会では前橋ロータリークラブが創立70周年を迎える5年後を見据え、長期的なクラブビジョンと、あるべきクラブの姿を明確にすべく、過去の提言の検証と現状分析を行い、かつ、RI、地区の戦略計画との整合を踏まえながら考察した。

1. 2004～2006年 3カ年のクラブ改革提言からの考察

2004年から開始された21世紀特別委員会による「クラブ改革提言 Part I～III」では現状を包括的に分析し、クラブの目標や改革の方向性を明確化した。

それは大局的な見地からクラブの将来に向けた具体的な行動計画を表すと同時に現状抱える問題点に切り込んで、諸処の改善策を提言したものである。特に最終年となるPartIIIではCLPに基づく「あるべきクラブ運営のためのクラブ細則の改訂」に言及し、実際に翌年度の改訂に繋がった。

現在の理事・役員、委員会構成等はこの改訂細則に基づいて再編されたもので、その成果は連綿として現在に受け継がれている。

このPart I～IIIの提言の根底に流れるクラブ改革の理念は「**会員が充実したロータリーライフを享受し、かつ社会的評価(存在価値)の高いクラブに再生する**」である。それは13年を経た現在、そして将来にも色あせることの無い共通する理念である。

2. クラブ現状分析

① 会員満足度アンケートによる12年間の推移分析

委員会では2006年、2012年、2018年に実施した会員満足度アンケートの数値比較を行った。以下はその推移からクラブの傾向を検証してみた。

○会員がクラブに対して感じる風土、雰囲気、満足度は12年前から比較すると総じて良好になっている。しかし反面、クラブが前例主義であると考えられる割合は増え、変化に柔軟に対応し、新しい試みに積極的であると思う割合は減っている。

- クラブが RI や地区の提唱する諸活動へ参加する度合いに対して現状が適当との答えが増加している。これは地区補助金事業、グローバル補助金事業の浸透で、地域社会奉仕、国際奉仕への関心、理解が深まった結果と思われる。しかし会員のプロジェクトへの参加状況になるとその割合は決して向上していない。
- ロータリー財団、米山奨学への寄付行為は、過度と答えた割合は減り、妥当が向上している。ただ依然として一割以上の会員が過度と感じており、個人寄付を行う会員数の低迷につながっている。
- 例会への参加状況については例会を楽しんでいるとの答えが 9 割を超えているが、「積極的参加」が低下している。委員会活動は逆に増加しているが、双方とも積極的に参加しているとした会員は 6 割にとどまっており、決して高くない。(例会出席率の推移は後で述べる)
- 個別の意見、希望については興味ある回答が多いので、別紙アンケートの資料を参照されたい。

② 会員が考える前橋クラブの良い点、悪い点(長期戦略計画委員会委員 21 名回答の要約)

<良い点>

- ・歴史と伝統、組織。・紳士的な雰囲気、良い居心地、会員の仲がよい、派閥がない、会員の積極性。・事務局がよい。　・会員が多く異業種交流の幅がある。　・例会での席を配置換えすること。

<悪い点>

- ・例会出席率が悪い。・委員会が機能していない。・寄付金に協力的ではない。
- ・前例主義。・部会活動の情宣が足りない。・一部の会員に負担がかかっている。
- ・進んで役を受けようとする会員が少ない。・会員満足度アンケートが生かされていない。・IT 関連の進歩がない。

③ 過去5年間の例会出席率

下記は2013年から2018年での5年間の半期ごとの実例会出席率である

年 度	7月～12月	1月～6月	年 間
2013～14	71.71	71.59	71.65(%)
2014～15	69.98	67.85	68.91
2015～16	69.50	68.88	69.19
2016～17	67.75	62.82	65.28
2017～18	66.85	65.59	66.22

※2017-18年度において個人の例会出席状況をみると48名の会員が60%台の出席率となっている。

以上、掻い摘んで現状を追ってみた。これらから導き出されるものは、「前橋ロータリークラブ」は県内トップレベルの規模と歴史と伝統を持ち、常にリーディングクラブとしての態様を維持しているが、個別に内容を見ると決してそれぞれのレベルが高いわけではない。特にクラブの活力のバロメータである例会出席率はここ数年低下傾向にあり、昨年度において2840地区45クラブ中42番目の出席率(修正後)となっている。寄付行為においても、個人寄付額はやはり45クラブ中最低レベルである。また組織構成も22の委員会(特別委員会を除く)があり、実際に機能していない委員会があるのも事実である。

反面、ロータリーの会員ニーズのもっとも高い、異業種交流の場としては地区内有数の規模を誇り、組織としてのステータス性も一定度ある。会員親睦では部会活動や家族の積極的な参加など活発である。また大手会社の転勤に伴う会員の入退会が多い点や、前橋奨学生制度などクラブの独自性も持ち合わせている。

将来のクラブのあり方を考えるとき、ロータリークラブへのニーズや関心度の違う会員が概ね共有することのできる「前橋ロータリーイズム」をさらに強固にしていき、会員がそれを自覚し、名実共にトップクラブとしての資質を向上させていくべきだろう。

3. RI 戦略計画・地区方針からの考察

RI 理事会は2018年6月、現行の戦略計画をさらに時代の変化に対応させるべく、2020年以降のロータリーを導くためのビジョン声明を打ち出した。それは、ロータリーの中核的価値観である「奉仕」・「親睦」・「多様性」・「高潔性」・「リーダーシップ」を不変のものとしつつ、今後新たに策定される戦略計画の土台として4つの優先事項を定めたものである。

※以下はその概要。RI とクラブではスタンスが異なるため、この4つの優先事項をクラブの目線でとらえた。

<より大きなインパクトをもたらす>

ロータリーは、常に入会者、協力団体、寄付者にとって魅力ある団体であり続け、人々の生活をより良くするための変化をもたらすことに努力しなければならない。

今後も幅広い奉仕活動においてよりインパクトのあるプロジェクト、プログラムを実践し、かつその成果を効果的に図ることに注力していく。

<参加者の基盤を広げる>

現在、ロータリーと無縁である人々はロータリーに関心を持つことはない。ロータリーも既成の枠組みにとらわれて組織の基盤を新たに換えようとしなない。しかし社会をより良いものにしたいと考えている人々の価値観の多様化を認め、ロータリーが役に立つことを理解してもらい、ロータリーもそれらの人々を迎え入れるように構造を変革し、一体となって行動できる機会を造っていくことを目指せねばならない。

<参加者の積極的なかわりを促す>

めまぐるしく変わる現在の社会において、クラブは会員のニーズにあった経験と価値を理解し、ともに奉仕し、人間関係を広げ、より満足のいく機会を会員に積極的に提供し、参加意欲を高めなければならない。そして会員はそれを当然の権利の行使として認識しなければならない。

<適応力を高める>

ロータリーはそのビジョンを達成し、変わりゆく世界的な傾向に追いつくため、組織の構造と文化を柔軟に発想し、進化させていかねばならない。

2019-2020 RI会長のテーマは「ロータリーは世界をつなぐ」(ROTARY CONNECTS THE WORLD)である。それはまさにロータリークラブが創設された最大の理由が「つながる」ことであり、1世紀が経過し、拡大した世界的な組織と、様々な運動が、今後どのような変化してもこの「つながり」が将来にわたってロータリーの経験の中核にあり続けると RI 会長は確信している。

クラブに求められる今後の改革も、この「つながり」と上記4つの優先事項を念頭に実行していくことが必要であろう。

2019-20地区テーマは「クラブ イノベーション」。その地区目標の1番目が「クラブ改革を実践しよう」である。2017年に策定された2020年までの地区戦略計画における最終年として、クラブの例会頻度、会員資格や会費のあり方まで踏み込んで、自クラブの将来像を検討することを奨励している。

ここ数年、ロータリーを取り巻く環境、そしてロータリアンの意識の変化を鑑み、クラブのあり方を変えて行かねば将来の発展は難しいとの認識が常識化している。しかし、2019-20地区ガバナーの国際協議会報告にもあるように、それらは世界の趨勢となっているのに比べ、日本においてはまだクラブの危機感は乏しいと指摘されている。

今後、日本のロータリーも変化していくのは必然であろうが、大事なことはクラブには様々な特色があり、それぞれの存在意義を持っている。すべてのクラブが一律な構造や文化になる必要は当然無い。

4. クラブビジョン提言

ービジョンとは、将来実現すべき明確な「イメージ」であるー

これまでの考察で得られたものをまとめると、2つのヒントが浮かび上がってくる。

- 1 時代の変化に合わせてロータリークラブも変革していかなければ将来、存続するのが難しくなっていく。
- 2 中核的価値観に沿った活動を通じて、会員全員が共有できるクラブの特徴、いわゆる「前橋クラブらしさ」を発揮する。

これをキーワードに、前橋クラブの長期的な方向性を考えることが「クラブビジョン」につながって行くのではないか。

ビジョンとは、将来実現すべき明確な「イメージ」であると解釈される。

すなわち、今後、激変する社会とロータリーを取り巻く環境に、柔軟に対応しつつ我々ロータリアンが充実したロータリーライフを享受し、かつ社会的評価(存在価値)の高いクラブであり続けるための「^{しるべ}標」となるもの、または我々ロータリアンが行っている(行っていく)多岐にわたる活動分野の先にある風景、そのイメージを会員全員が共通認識として持てるもの、それが下記に提言する「クラブビジョン」である。

クラブビジョン

「ロータリーの理念を活かし、共助社会実現の担い手になろう」
「クラブのアイデンティティを確立しよう」

「ロータリーの理念を活かし、共助社会実現の担い手になろう」

共助社会とは、言葉どおり「共に助け合う社会」である。その意味では「互助」に近いが、より対象が広範囲となる。「共助」を理解するのにわかりやすい事例は、近年多発している大きな災害時に被災地に駆けつけるボランティアの活動である。これは決して強制された訳ではなく、自発的に困っている人々を助けたいとの意識が働いた結果である。

共助の精神は災害や防災だけに発揮されるものではない。今、日本は世界が経験したことの無い超高齢化・少子化社会に突入している。明らかに生産年齢人口が減少し、

社会及び経済構造は大きく変化していくと予想される。「公助」の限界がある中で、次の時代も地域社会が自立し、高度な文化を維持していくためには日本人が潜在的に持ち合わせているこの「共助」の精神をさらに社会全体に醸成させていくことが必要であろう。

ロータリーの奉仕の理念はまさにその精神につながるものである。

ロータリーこそ、共助社会の実現の担い手となることを目指さなければならない。

しかしだからといってロータリーが全く新しい運動を始めるということではない。過去、現在行っている運動の延長上に「共助」があると言っていい。大事なのは、ロータリーの奉仕の確信的な目的として「共助社会の実現」を据えることである。

ロータリー百科事典 2.「奉仕の理想」の項に、次の一文があるので引用する。「ロータリークラブは何処においても、一つの基本となる理念、「奉仕の理想」を持っている。それは他人に対する思いやりの心、助け合いの心である」

「クラブのアイデンティティを確立しよう」

前段で何回も述べているように、社会と会員意識の変化に対応するために、クラブは将来、これまでの形態を大きく変えていくのかもしれない。しかし、そうした中でもクラブの独自性と存在意義を強固に持つことが大事である。

前橋クラブは基本的に強いクラブである。それは先達の努力と熱意によって形作られてきた。我々はその「強さ」を失ってはならない

そのために、すべての会員がロータリーライフを楽しみながら、その活動において自己を実現し、前橋クラブの会員として自負を持つ。内にも外にも「前橋クラブらしさ」を体現できるようなクラブのアイデンティティを確立し、それを会員が自覚することが必要である。

次次年度は当クラブより山田地区ガバナーを輩出する。その際の地区での活発な活動がクラブのアイデンティティを自覚する絶好の機会なると思う。ぜひ会員が積極的に参加するべきである。

5. 短期数値目標と行動計画

前項のクラブビジョンを実現していくうえで、5年後の70周年次が一つの道標となるが、ここではその前段になる長谷年度までの3年間の数値目標と行動計画を明示したい。

○数値目標

1. 会員純増数 年1名以上
2. 例会出席率 実質75% 修正後80%以上
3. 寄付行為 個人目標額の達成 財団寄付金 150ドル
米山奨学寄付金 16,000円
ポリオ寄付金 30ドル

※強制ではなく奨励。不足する場合は新たな方策を講ずる。

4. 地区大会 登録100% 会員実参加率 70%以上
5. 地区協議会 参加対象者 80%以上(代理含む)

○行動計画

1. クラブビジョンの会員への浸透
2. 「共助社会」の研究とロータリーとしての戦略計画策定
3. (新)会員研修の実施
4. クラブ細則の検証・見直しと組織改革

<後記>

以上、2018-19長期戦略計画委員会として考察した結果、上記2つのビジョンと短期目標を提言したい。今年度は提言のみとなるが、これが理事会等で承認を受ければ、次年度以降のクラブ運営に活かしてもらいたい。

ただ、このような提言の弱点は、時間の経過と共に初期のエネルギーを失い、陳腐化されていくことである。特にロータリーのように単年度で組織が変わるものはその傾向が強い。ぜひ、この提言がお蔵入りにならないように長期的な仕組みを作っていただきたい。

2018-19 長期戦略計画委員会